

平成 27 年度「特別支援教育に関する実践研究充実事業
(特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究)」報告書

団体名	新潟大学教育学部附属特別支援学校
研究開始年度	平成26年度

I 概要

1 指定校の一覧

設置者	学校種	障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
国	特	知的障害	<small>にいがただいがくきょういくがくぶふぞくとくべつしえんがっこう</small> 新潟大学教育学部附属特別支援学校

2 研究テーマ

総合大学の附属校内にある発達障害通級指導教室の利点を生かした、学習障害児への効果的な指導法の追究

3 研究の概要

(1) 研究仮説

在籍校、家庭、当教室の三者が、共通の指導方針の下、対象児童の特性に合わせた指導・支援を行うことで、対象児童の学習上の困難が軽減され、学習に意欲的に取り組むことができ、生活意欲も高まるであろう。

(2) 研究内容

- ①特定の学習に困難がある児童への通級による指導（自立活動）において、意欲をもって学習に取り組むことができ、自分に合った学び方を身に付けることができる支援を明らかにする。
- ②児童が在籍校の授業の中で、自分に合った学び方で生き生きと学習に取り組むことができる、家庭や在籍校との効果的な連携の在り方を明らかにする。

(3) 研究の方法

- ①在籍校と家庭、当教室が同じ支援方針で指導に臨み、指導の効果を上げることができるよう、連携のツールとして個別の指導計画を活用する。
- ②新潟大学の教育学部の特別支援教育専修や工学部「新潟市障がい者 IT サポートセンター」の教員、新潟市教育委員会の特別支援担当指導主事等と連携し、専門的立場からの情報や助言を児童の支援に生かす。
- ③当教室で明らかにした支援が在籍校や家庭での学習に生きるように、担任・保護者との情報交換を効果的に行い、連携して支援方法を検討する。

(4) 評価の観点及び評価方法

①児童の実態の評価

WISC-IV、KABC-II等の検査、読み書き、計算等のチェックリスト、在籍校のテスト、本人、保護者、在籍校担任からの聞き取り、学校参観での観察

②困難さの克服・改善状況の評価

在籍校のテスト、本人、保護者、在籍校担任からの聞き取りやアンケート

4 研究の成果

(1) 児童が意欲をもって学習に取り組むことができ、自分に合った学び方を身に付けることができる支援について

①児童とのかかわりを通して把握した興味・関心、思いを生かして支援を検討したことで児童の学習意欲を喚起し、学習効果を高めたり児童が自分に合った学び方を身に付けたりすることにつながった。

②児童の興味・関心や得意なことを生かし、更に苦手なことを補う支援を講じたことで、児童は、苦手な学習にも意欲的に取り組むことができた。こうした支援を考える際に、大学や新潟市教育委員会の教員と合同で情報交換会を行って支援に関する検討を行い、専門的な立場からの指導・助言を受けたことも有効であった。

(2) 家庭や在籍校との効果的な連携の在り方について

①家庭、在籍校、当教室の三者が集まる支援会議の設定し、協議により目標や支援の方針を決定し、それぞれの役割を確認しながら個別の指導計画を作成した。その結果、三者の役割が明確になり、それに応じた支援を主体的、積極的に行うことができた。

②在籍校や家庭での具体的な支援の検討に際しては、当教室での児童の取り組みの様子や本人の気持ちを踏まえながら、在籍校担任や保護者と一緒に考えたことで、在籍校での授業や家庭での児童の学びにつなげることができた。

こうした結果をまとめ、当校の第38回特別支援教育研究会において、実践報告として発表した。また、新潟市と連携し、当教室と在籍校の取り組みの成果を市内小中学校に向けて発信する中で、特別な支援を必要とする児童生徒への合理的配慮について問題提起ができた。

5 課題と今後の方策

○児童の実態から支援方法を検討したが、日々の学習方法の変容になかなかつながりにくい場合があった。その要因として、これまで本人の特性に応じた支援を受けてこなかったことによる全般的な学習不振から学習意欲が低下し、学習に向かう姿勢が身に付いていないことが推測された。その場合、通級による指導の中では、まずは学習に向かう姿勢をつくったり自己肯定感を上げたりすることが中心となり、児童に合った学び方が身に付く段階までには至りにくかった。改善に向けては、在籍校での支援の在り方の検討が更に必要である。在籍校で、児童がより良い学びができ、達成感や充実感をもつことができる環境をつくることのできるように、連携を深める必要がある。

○児童に合った学び方を在籍校や家庭で実現するためには、本人の思いにも十分に寄り添う必要があった。通級担当者の役割として、今後も児童の思いを在籍校及び保護者に具体的に伝え、同一步調で支援する必要がある。そのために、通級による指導の中で児童が生き生きと取り組む姿を発信するなどして、相互の理解を深め、児童にとってより良い学び方ができるようにする。

○児童に合った学び方の検討の際に、更に実態把握の精度を高め、より児童に合った学び方や支援方法を提供することで、児童の学習意欲を高め、学習効果を上げることができると考える。

今後も、大学の専門の教員と連携したり研修会に参加したりして情報を集め、実態把握の精度を上げ、より児童の特性に合った支援方法を提供できるようにする。